

神辺靖光「一九五〇年前後の早稲田大学をめぐる回想」

雨宮和輝

はじめに

早稲田大学百五十年史編纂委員会では、『早稲田大学百五十年史』第二巻編纂を目的として、教員経験者や卒業生からの聞き取りを進めている。本稿は、新制大学下の早稲田大学文学部第一回卒業生である神辺靖光氏から「一九五〇年前後の早稲田大学をめぐる回想」という手記と、手記をいただいた際に聞かせていただいたお話の内容をまとめたものである。

二〇二三年一月二三日（月）、神辺氏のご自宅にお伺いして、手記を受け取るとともに、お話をうかがった。聞き手は事務局スタッフの田中智子（当時助手）と雨宮和輝（非常勤嘱託）である。

神辺氏の御略歴は左の通りである。

- 一九二九年二月 東京市本所区（現東京都墨田区）に生まれる。
- 一九五一年三月 早稲田大学第一文学部哲学科教育学専攻卒業
- 一九五六年三月 早稲田大学大学院文学研究科教育学専攻修了
- 一九七九年三月 文学博士（早稲田大学）
- 一九八六年一月 兵庫教育大学学校教育学部教授兼大学院教授
- 一九九四年四月 明星大学人文学部教授兼大学院教授
- 一九九八年三月 明星大学定年退職

以下、神辺氏から直接聞いたお話を踏まえて、手記に関して解説していく。

まず「一、早稲田大学文学部に入学するまで」に関する時期についてのお話では、神辺氏が大学に入学されるまでの経緯や時代状況についてのお話であった。戦時下、中学生であった頃は勤労動員では、工場で飛行機の部品などを作らされていた。その後、徴兵猶予の特権があった官立東京第一師範学校を受験し合格する。しかし、ほどなくして師範学校でも徴兵猶予が撤廃され、入学後には学生の身分のままに本土防衛隊に配属された。その後、一九四九年、新制大学制度下において、旧制専門学校生徒の募集枠があった早稲田大学第一文学部哲学科教育学専攻に合格、第三学年に編入入学されることになったのであった。編入学した際には、同学年の学生たちの素性もわからず、年齢もバラバラといったような状態であり、独特の雰囲気があったと述べられていた。

次に「二、新制早稲田大学文学部哲学教育専修の情況」に関するお話としては、敗戦直後の早稲田大学の授業についての内容であった。当時の文学部の授業や、独自性のある教員が紹介されている。ただ、戦後の大学では、教員

がそもそも不足しており、学内でも教員の質が問題とされていたと述べられた。また、原田実先生に関しては『早稲田大学文学部百年史』に記載されているように、実験小学校のない戦後の教育学部設置については問題視されていたという。

そして「三、新制大学院文学研究科教育学専攻の情況」では、第一文学部哲学科教育学専修を卒業された後、新制大学院文学研究科の修士課程に進学された際のお話であった。学部での授業よりも専門的な研究に関わる授業内容や、修士論文の作成までの経緯、そして、その後博士課程に進学するまで印象的な教員に言及されている。例えば、教育学の担当する教員の業績は石川啄木に関する著作が一つだけといったような経歴であった。また、別の教員にはテストの点数が悪かった学生が直談判すると、対応してくれたという噂があったが、論文や著作といった業績が一本もないという経歴とのことであった。

最後に「四、一九五〇年前後の早稲田大学の雰囲気——一学生がみた学生生活と学生運動——」では戦後直後の早稲田大学周辺、そして、学生生活についての内容であった。当時の早稲田大学には、戦争から引き揚げてきた学生が多く、大学の周辺は焼け野原になっていたが、バラックが多く立ち並び、ライスカレーやかつ丼を食べることができた。また、アルバイトもしており、家庭教師が稼ぎの良い仕事であった。他の学生の中にはピーナッツや鱈を学内で市場のようにして売っていた者もあり、それらは学生だけでなく、教員も購入していた。また、帝国劇場を除いて、劇場はほぼ燃えてしまったので、大隈講堂がその代わりの役目を果たした。浅沼稻次郎といった政治家の講演や、バレエや演劇などが実施されていた。戦後においては、作家や演出家などが学生と一緒に授業を受けており、すでに社会で活躍しているような人達が在学していたのは、早稲田大学独自の状況であったと述べられていた。学生運動に関しては、レッド・パージが激しかった当時、学内では活動家の学生たちが演説を行っていた。しかし、過激とされた

学生運動であるが、実際には学生の一部分が行っていたものであり、そういった学生が熱心に運動する一方で、勉強やスポーツに励んでいる学生も多くいたといった記憶を述べられていた。早稲田大学で問題とされていることが、そのまま社会問題に直結してしまう傾向が当時はあったと神辺氏は指摘された。その後、先生自身も大学院に進学してからは研究に励むようになり、学生運動に対しては傍観する程度であったことを言及されている。

以上のように、神辺氏には戦後直後における早稲田大学の状況や授業内容、その周辺地域における状況についてお話をしていた。この手記は、戦後直後の早稲田大学の状況を知ることができる資料として非常に重要なものであり、戦後期を取り扱う『早稲田大学百五十年史』にも有用な情報をもたらしてくれるものと言えるだろう。

あめみや・かずき（早稲田大学歴史館嘱託職員）

一九五〇年前後の早稲田大学をめぐる回想

神 辺 靖 光

一、早稲田大学文学部に入学するまで

物ごころついた小学校三年生の一九三七年に日中戦争がはじまり、東京府立第二中学校（旧制）に入学した四一年に太平洋戦争がはじまった。そして第二中学校を卒業した四五年に敗戦。戦後の大混乱のさなかに新制早稲田大学第一文学部哲学科教育学専修第三学年に編入学したのである。日中戦争から敗戦、戦後の民主国家成立までに幾多の混乱と学校制度の変革があった。私の世代はその制度変革からくる混乱をもろにかぶったのである。なぜ早大文学部の教育学専修を志望したのかと問われても、この異常な事態の中で対処しなければならない受験生の心情は、異常事態そのものを説明しなければわからないであろう。よってそれを略述する。

一九四四年春、労働力の不足から四五年の春を期して五年制の中等学校を四年制に短縮し、卒業まで軍需工場で働かせるという学徒勤労働員令が発せられた。私たち都立第二中学校四年E組五〇名は立川飛行機株式会社の組立工場に配置された。私達の都立二中での授業は実質三年間で終ったのである。勤労働員中、海軍兵学校や陸軍士官学校、また甲種飛行予科練習生や陸軍特別幹部候補生の募集があつて二〇名ほどの級友が受験し合格して去っていった。翌四五年になると敵機の本土空襲が本格的になつて動員先の工場も大規模な被害を受けたが、そんな折、文部省から上級学校受験の通知があつた。受験は一回限りのこととし時局柄、筆記試験はせず、三年間の成績評価書、勤労作業精

動証と面接試問で可否を決めるといふものである。

私は小学生の頃から物語ものがたりや小説が好きで、中学三年頃には文学愛好者になっていたので高等学校文科（旧制）に憧れていた。しかるに前々年の四三年一〇月、文科系の大学、専門学校、高等学校の徴兵猶予の特権が剥奪はくたされてしまったのである。学業途中で兵隊に行かねばならない。しかも士官ではなく兵卒としてである。これは困った。兵隊はいやだと公言できる世情ではない。しかし理科系の学校を受験する気は全くない。いろいろ考えた末、文科系とも理科系とも判然としないが、小学校教員養成の師範学校を受験することにした。師範学校には徴兵猶予の特権があったからである。師範学校は四三年から官立専門学校扱いとなり、都道府県立からすべて官立学校に昇格していた。私は官立東京第一師範学校を受験し合格した。東京の軍需工場の大半は連日の空襲で機能不全であったが、私たちは指示通り六月末日まで工場に勤務し、七月はじめ、東京第一師範学校に入学した。しかしすぐに本土防衛軍の一部隊に編入され、明け暮れ対戦車戦闘訓練をしながら八月一五日の終戦を迎えたのである。

戦後一年間、師範学校の授業は全く面白くなかった。つまらぬお説教ばかりで心に響く授業はなかった。しかし学校生活は面白かった。私と同期の受験生は驚くほど多かった。恐らく私と同じ徴兵猶予をねらったことと思う。九月になると応召された上級生が続々帰り、一〇月には海軍兵学校その他軍関係学校の在學生が編入学してきた。彼らは高等学校編入学を望んだがGHQが軍国主義化を恐れて編入學生を制限したからである。GHQのこの誤判断は笑われて翌年から解除されたが、このように受験界は混沌こんとんとしていたのである。

学校は活気づいた。授業は休講が多かったが、生徒は登校し各教室たむらに屯して議論する。早くも天皇の戦争責任を追究する者もあったし、学生の変節をなじる者もあった。一一月には日本自由党をはじめ、社会党、共産党などの政党が結成され、演舌会がはじまったので、それを聞いては学校で論じ合う者もあった。また街の闇市やいかがわしい軽

演劇にうつつをぬかし、その情報を学校で交換し合う者もあった。やがて校内新聞や自治会、各種運動部、学習会等が無秩序にできて授業はなくても学校は活気づいてきた。私は児童文化部に入った。私達は人形劇を近隣の小学校で上演して廻り喝采を博した。私は劇作、演出、声優を担当したが、面白くなって友人と語らって新劇団をつくり四六年五月五日、私の居住地立川の小学校講堂を借りて上演したところ、大盛況で「小学生新聞」(毎日新聞系)がこれをトップ記事に報じてくれた。これをみた立川市の学務課(教育委員会成立以前で小学校に権限を持っていた)が夏休みの行事に緑陰子ども会を催したいと我々に協力を求めた。感激したわれわれは人形劇に童話、児童劇、舞踊を仕立て市内の五、六ヶ所でこれを催し盛会裏に終えることができた。

この年、一月から三月にかけて新協劇団、俳優座、文学座等の新劇の劇団が創立された。六月には新劇人合同のシェイクスピア「真夏の夜の夢」が焼け残った帝国劇場で上演され、八月には日比谷公会堂で貝谷バレエ団の「白鳥の湖」が上演された。私は高価な入場券を苦心して手に入れ、これらを観劇したが、この夢のような美しい舞台に呆然自失の呈であった。若年の至りで有頂天になった私は将来、劇作家、演出家になろうと決心し、その勉強をしはじめたのである。

一九四六年三月、米国教育使節団の報告書が公表され、六三三制が提示されると従来の中等学校、高等学校、専門学校の改革や変更が取り沙汰されるようになった。官立高等学校と官立師範学校はEのから特に睨まれて廃校になるといふ噂もあった。師範学校二年次から教育学の授業が面白くなった。若手の教員によるものだが米国教育使節団のMission Reportをテキストに日本の教育制度を批判的に講述しはじめたのである。特にカリキュラムについては心が踊った。日本では国家が、文部省が小学校、中学校の教則をつくって国民に押し付けるが、米国では各学校の教員がその地域の人々の意向を汲んで自らつくるといふのである。これはすばらしい。それならばいっそミッションレ

ポートの原文を読もうということになって有志数人ではじまった。しばらく離れていた英語学習は辛かったが私にとって有効であった。

第三次は教育実習で、附属小学校と郡部の小学校及び旧市内の小学校各六週間ずつという方針で、私は六月から西多摩郡青梅町の小学校、九月から都内浅草の小学校で実習した。いずれも戦時中の男性教員の出征で復員が完了せず、教員不足であったため、われわれ実習生に授業がまかされた。浅草の小学校は空襲の被害を受けて完全に復旧されず、一部の教室には教員の家族が住み込んでいたので、三部授業でやりくりしていた。敗戦国の義務教育の奮闘をみる思いであった。

四八年になると友人の都内小学校教員の就職先が次々に決っていった。私は先き行き不明のまま迷っていると或る日、北多摩郡西府村の新制中学校の教頭が突然、尋ねてきて開校以来一年になるが教師が欠員で英語の授業ができなかった。新学年度から英語をしたいから本校の教諭になってくれということであった。そこで四八年四月から西府村立西府中学校で英語を教えることになった。国民学校高等科がそのまま横すべりしたこの新制中学校では、一、二、三学年の全生徒が一斉に初年度の英語から週二時限ずつ学習するのだから、その程度は旧制中学校第一年の一学期終了程度である。私なりに努力し生徒もこれに応えてくれて私として楽しい思いもあるが早稲田大学進学に関係ないのでこれは止めよう。

こうした環境の中でも私の劇作、脚本家、演出家志望は衰えることがなかった。当時、発行しはじめた演劇雑誌『テアトロ』に毎回脚本を投稿し続けた。ここで入賞すればプロの劇作家になれるし、予備門として「入選」という賞もあったが、入賞はおろか、入選もできなかった。しかし演劇や舞台芸術への憧れは強まるばかり、そんな矢先、早稲田大学の大隈講堂で演劇講習会があるという情報を知ったのである。四八年の夏休みがはじまる頃であったと思う。

国電（現^ニ）高田馬場駅を降りて早稲田の裏口通りから裏門をへて大隈銅像の広場に出ると広い正門と立派な大隈講堂が現われる。正門を隔てた大隈講堂の前の道路を人々や自転車^が通行している。あつこの大学には塀^がないのだ。と錯覚した。後年、欧米の大学を見学して、大学は街の中に点在するものと認識したが、日本の学校しか見たことのない眼には異様な風景に見え、私にとつて屏のない、自由な開放的なすばらしい大学に思えた。

大隈講堂での演劇講習会は面白いものであった。早稲田の文学部演劇学科の河竹繁敏主任教授を中心に演劇博物館のスタッフや脚本家、演出家、俳優、また歌舞伎役者や人形浄瑠璃の人形使いまで登場する豪華版で私の脚本演出家志望は高まるばかり、まず早稲田大学の演劇科に進学しようと決心した。

一九四九年三月、早稲田大学は国立大学に先駆けて新制大学に編制変えし旧制専門学校の卒業生を受け入れることになった。私は受験手続きをするため早稲田に向つた。キャンパスは空襲による廃墟もあれば応急手当の建物もあつてちぐはぐな状態で各学部の事務所に受験生が行列をつくつていた。中でも文学部は壮観で、国文学を筆頭に英文、仏文、独文、露文、芸術、教育、東洋哲学、西洋哲学の学科専攻別に受験生が長い列をつくつていた。私は度肝を抜かれて、とりあえず志望の芸術科演劇専攻の列をみるとこれが長蛇の大行列、腰を抜かしてしまつた。これは駄目だ。私は落ちるゝと咄嗟^{とっさ}に判断した。だが、田舎^{いなか}の英語教師は続けたくない。なにがなんでも早稲田の文学部に入りたい。それならば競争率の低い学科専攻を探すほかはない。そのような眼で探すと東洋哲学と教育学の行列が短い。仏教だの、儒教だのを学ぶ気はないから咄嗟^{とっさ}の判断で教育学専攻に変更し、筆記試験、面接試問の後、晴れて合格。一九四九年四月、私は早稲田大学第一文学部哲学科教育学専攻の第三学年生になつた。

後年、時々想う。戦後の舞台芸術にあこがれてわずか二年ばかりのことだが脚本家演出家になるべく早大演劇科を目指したのに受験生が多いとみるや咄嗟^{とっさ}に方針をかえて易^{やす}きにつくとくというのはいかにも軽率ではないか。こういう自

間に何度も魔まわれたが、その後も私は咄嗟の変更をくりかえし職場を変えながら教育畠を歩み、テーマや研究グループを渡り歩きながら教育史研究を続けた。咄嗟の変更は私の習性になっている。最近思う。あれは戦争末期一年半の生死を別けた咄嗟の判断が身についてしまったのではないかと。学校から予科練に誘われた時も、わずか数日で決めねばならない。その判断が生死を別けるのである。空襲で敵機に襲われた時も咄嗟の判断で逃げるか、止まるか決断せねばならないし、逃げるにしてもどちらに逃げるか決断せねばならない。その決断が生死を分ける。ぐずぐず判断を遅らせてはならない。私たち中学クラス五〇名は陸海軍の士官の学校に進学した者が多かったから終戦後の進学に苦労した。しかし私同様、戦後、各種の専門学校、大学を渡り歩いて変則な学習を続け政府高官になった者もあるし、一流企業の社長になった者があるかと思えば、田園で果樹園をひらく者、町医、歯科医、私同様の教員暮らしと多士済々である。進学した工業高校が爆撃で粉砕ふんさいされたため、道路工事の人夫で働いているうち飯場はんばの親分になり、東京オリムピックの下請け工事で財をなした男もいる。戦争末期に身につけた咄嗟の判断も軽率とばかり言い切れぬものがあつたのではないかと思うことしばしばである。

二、新制早稲田大学第一文学部 哲学科教育学専攻の情況

校舎や教室は応急に整備されて授業は順調に受けることができた。しかし窓は破れたままの所があり暖房も充分でなかった。一部焼け跡があつたが、一九五〇年六月の朝鮮戦争勃発以後の鉄くず暴騰で、九月に登校すると瓦礫の山がきれいに整地されていた。以後、新校舎建築が急ピッチに進む。この年から食糧事情が次第によくなり、図書館地下室に応急の食堂ができて安いカレーライスが食べられた。弁当の持参者は荒れ果て自由に出入りできる大隈庭園で

食べた。一方、鶴巻町の焼け跡にはブリキ屋根の堀ほつ建小屋たこやができて、焼そばや汁粉を売ったり、揚げたての豚カツを炊きたての白米にのせたカツ丼がうまくて行列ができた。学生の服装は兵隊服が多かったが次第に学生服に戻りつつあった。教科書がないのですべて教授の講義を筆記した。

教育学専修の必修授業で感銘を受けたのは原田実教授の「教育学原論」、戸川行男教授の「教育心理学」、東大教授で早稲田に出講していた上村福幸講師の「西洋教育史・古代中世」であった。原田教授の講義は自由主義、児童中心主義の立場から新しい日本の教育学を打ち立てようとする熱意のこもったものであった。上村講師の「西洋教育史・古代中世」は古代ギリシャのスパルタ教育の残虐性からはじまってソクラテス、プラトンの教育論、中世以後の大学の成立とその実態で、始めて聴く知識。感銘を受けた。先生はテキストもノートも持たず、時々、チョークで人名や事項を書くが終始、静かで淡々とした講義であった。大学の講義とはこう言うものかと想った。戸川教授の「教育心理学」も同様で終始、語りかける授業であったが、東西の文学作品を題材に劣等感情とか、恐怖感情を説明された。聴く者は耳をそばだてたものである。当時、戸川先生は金子書房から出版された教育雑誌「児童心理」に論文を寄せられていた。文理科大学系の心理学者によつて占められたこの研究雑誌に唯一、私学の教授が執筆したので注目されていた。戦後、実験心理学が興隆し、早大の心理学専攻者も戸川先生の指導でこれをはじめたのに教育心理学では文学を題材にしているのである。先生の該博な知識に敬服する。「教育社会学」の田制佐重先生は奇行の多い人であった。直接ジョン・デューイに学んだというのでデューイ先生と呼んでいたが、講義はノートを読むだけであった。時々呂律ろれつが廻まわらなくなる。年若い女子学生らしい女性に介護されながら校内を歩かれた姿が時々見られた。「日本教育史」の大沢俊吉先生は本学に教育学専修をつくった最初の主任教授稲毛金七博士の弟子というふれ込みであったが講義は粗末なものであった。はじめの一ヶ月ほどは神がかり的な日本古代史についての宮みやを話したがやが

て戦時中、上海で遊んだ話になり、遂に休講続きになった。五〇年には小沢恒一教授の「教育行政学」、赤堀孝助教の「教育課程論」、大槻健講師の「教授法」等があったが印象が薄い。上村福幸先生の続きの「西洋教育史・近代」を東大から太田堯先生がきて教えてくれた。近代市民社会のメカニズムやら資本主義の構造等の説明ばかりで、期待はずれであったが、学生間では人気があった。教育学専修の授業の感想は大方、こんなところである。

一般教育の授業で私が選択したものは次のようである。福井康順教授の「東洋思想」。樫山欽四郎教授の「西洋哲学」。谷崎精二教授の「欧米文芸思潮」。河竹繁俊教授の「演劇概論」。青野季吉講師の「文芸評論」。川本茂雄教授の「言語学」。京口元吉教授の「史学概論」等でも生涯、私の心の糧になった。忘れられないのは五〇年に起ったチャタレイ裁判である。イギリスの作家D.H.Lawrenceの『チャタレイ夫人の恋人』が猥褻文書として訳者の伊藤整と出版社が東京地裁に起訴された。これが報道されると与論が湧きたったが、早稲田の文学部では多くの教授が授業のはしほしで私見を述べた。中でも強硬にその芸術性を主張したのは文芸評論家の青野季吉先生であったが、逆にその猥褻性を指摘して俗書と決めつけたのが英詩の尾島庄太郎先生であった。裁判は高裁、最高裁まで上り、この小説は春本とは言えない芸術作品であるが、その芸術性を理解し得ない人々には猥褻文書となるという妙な理由で有罪判決になり、言論・出版の自由を抑圧すると非難された。時恰も朝鮮戦争勃発、日米講和条約、それに連動した追放解除で保守党政治家が続々復帰、左翼勢力が急旋回する中を一冊の外国の小説に対し猥褻か芸術かと大騒ぎする早稲田の文学部。一見、呑気にみえる文学部の教授たちを私はこれぞ早稲田の文学部と誇らしく思った。

教育学専修の学友は五人であった。T君は第一高等学院出身であるが途中、学徒出陣でフィリップピン戦に加わり帰還して復学したと言う。フィリップピンでの敗走記を書くのだと途中で姿を消した。新潟から上京したS君は下宿先の娘と結婚するが大学院までやるつもりだと言っていた。師範学校時代からの友人A君は教師論を書いて卒業し都内の

小学校教員になると宣言していた。彼は比較的早く都内の小学校長になった。最後の一人は都内の夜間中学を出て苦勞したと言っていたが素性を明かさなかった。卒業して姿を消した。四九年度と五〇年度の二年継続した原田実教授の「教育学演習」はこの五人の専修生のものであったが、他の教育学専修授業は教育学部の教育学科と一緒にあった。ここでわが文学部哲学科教育学専修と教育学部教育学科の違いを当時の学生として私の知った範囲で述べておきたい。

前に述べた通り、私は脚本家演出家になりたくて文学部芸術科演劇専攻を受験しようとしたが、その競争率の高さに恐れおののいて哲学科教育学専攻に鞍替えしたのだが、受験前から早大に教育学部と文学部の教育学専攻があることを知っていた。それは四九年春、私の新制早稲田大学編入学と入れ違いに旧制早稲田大学法学部を卒業した次兄から情報を得ていたからである。それによると教育学部は旧制の高等師範部が昇格したもので中学高校の教員養成だ。これに対し文学部の教育学専修は旧制の教育哲学科だから学者になれるという妙なものだだったが、私はなんとなく納得していた。

私立大学で戦前から高等師範部があったのは早稲田大学と日本大学である。早稲田大学は一九〇三（明治三二）年、高等師範部国漢学科、英語科を開設し、中等学校の国語漢文英語教員の養成に実績をあげてきた。戦後の新制大学改組に当って企画者（高等師範部長・赤松保羅教授と大学教務部長・佐々木八郎教授）は従来の中等教員養成の伝統を生かしつつ、新制大学の趣旨に合わせて全教職課程を研究する教育学科と国語国文学科、英語英文学科、社会科の四学科科制にしたのである。社会科という新しい学科は新学制発足とともに小・中・高等学校にできた教科で、旧来の地理、歴史、倫理、公民等を含み、さらに当時、言われはじめた社会教育まで包含していた。教員はほとんど文学部の兼任者で教育学部専任教授は極めて少なかった。文学部教育学専修主任の原田実教授も教育学部の教育学、教育原理（教職

課程)を担当していたが、^レ実験小学校を持たない教育学部はあり得ない」と批判的であった。原田教授は四八年に『アメリカ教育概説』を上梓し、コロンビア大学の実験小学校などを知っていたし、内閣の大学設置委員会の臨時委員や教科書検定調査審議会長などを務めていたから拙速の教育学部には極めて批判的で急ごしらえの社会科学など大学につくるべきではないと言っていた。原田教授は早大の教育学をつくった中島半次郎、教育哲学の創始者・稲毛金七の後を継いでリベラルな新しい教育学を構想していた。よって文学部哲学科の教育学は教育哲学と教育史を柱とする^{と述べていた。}

三、新制大学院文学研究科 教育学専攻の情況

一九五一年三月、私は早大文学部哲学科教育学専修を卒業した。卒業論文は、「芸術教育」という大それた題目で児童劇のことを書いたが、審査の後、原田先生が^レ希望するなら玉川学園の小学校教員に推せん^と言ってくれた。当時の私は生来の横着が直らず、将来の職務を決めないまま、演劇雑誌に脚本を投稿したりしていたら、四月のある日、原田先生から電話があつて、このたび新制大学院文学研究科に教育学専攻ができたから受験しなさいと言われた。そこで早速、手続をし、簡単な筆記試験と面接の後、大学院修士課程の学生になった。学生は文学部から二名、教育学部から二名の四名であった。

大学院教育学専攻の開講が遅れたのは専任教授が揃わなかつたからとの説明があつた。噂によれば教育行政学の小沢教授と教育方法学の赤堀助教授が審査で、はずされたということであつた。小沢恒一教授は郷里の友人石川啄木の「伝記」があるほか、教育学の著述、論文がなく、各地の師範学校や中学校長を歴任した経験が買われて教育行政学

を講じていたと言われる。赤堀助教授にも著書論文はないとされていた。よって急遽、教育学部で日本教育史を講じていた尾形裕康兼任講師、西洋教育史を教えていた上村福幸専任講師（東大教授）を招いて大学院教育学専攻課程を成立させたと言われていた。

教育学修士課程は原田教授の「西洋教育思想」、尾形教授の「日本教育史」、上村教授の「西洋教育文献研究」、戸川教授の「教育心理学」の四特殊講義と四教授が開く演習の中から三特殊講義とそれに属する三演習を履修し合格せねばならなかった。戸川教授の教育心理学は心理学専攻学生と合同だということで全員避けた。われわれは原田、尾形、上村三教授の授業を履修することになったが、私は上村教授がドイツ語のテキストを使うと聞いて躊躇した。教務課で聞くと一科目に限って他専攻の特殊講義、演習の履修が認められると言う。そこで上村教授の授業を避けて河竹繁敏教授の演劇学特殊講義と演習を履修することにした。原田先生から河竹先生に私の履修が懇願され、河竹先生は心よく受け入れてくれた。こうして私の新制大学院修士課程の学生生活がはじまったのである。

原田先生の特殊講義はルネサンス以降の教育思想家を取りあげたが、この年は特にルソーに焦点をあて、その斬新性を強調する一方、その亜流の思想家の世俗性を鋭く切り捨てた。尾形先生の「日本教育史特論」の講義はユニークなものであった。一年次は「江戸時代の公民教育」と題して公儀が出した高札、触書、道徳教科書としての六論衍義大意や往来物等の解説、続いて「読書始の研究」では古代、皇太子の学習始め儀式だったものが次第に皇族、公家、上級武家に及び、その講師の選抜がその時代の学派の争いとなり、明治維新では国学、漢学、洋学の激烈な争いの末、まず国学が次いで洋学がこれを制して近代日本の教学を確立した経緯を叙述した。講義は実証的で、論証することとその文献を板書した。すべて一級資料で、寺子屋や私塾、明治初期の教育改革などの知識はあるだろうという前提で話されているようであった。それらを充分学んでこなかったわれわれは苦しんだが、わずか四人の学生の前で大

声で講義される尾形先生の迫力に迫われ、われわれはひたすら筆記に励んだのである。続く演習はまず山鹿素行、次に細井平洲と近世儒者の名が次々にあげられ、その教育思想と教育業績を調べることが命じられた。その際、その人物に関する研究書を見ることは禁じられ、当人の著述を一級資料としてあげられた。素行で言えば、「聖教要録」「山鹿語類」「配所残筆」等は『山鹿素行全集』や滝本誠一の『日本経済叢書』に収録されている。われわれは図書館でそれらの全集や叢書の中から原典を探し出す研究者としては当然の修業を教えられたのである。河竹先生の「演劇学特殊講義」は楽しかった。当時日米講和会議直前で連合軍の占領からの独立が見通せる状況の中で歌舞伎の封建制に対する占領軍の監督が解除されつつあった。河竹先生は松竹や歌舞伎座の顧問か相談役のような立場で占領軍の担当者とやり合っていた。特殊講義では臨場感溢れるその場の雰囲気で日本とアメリカの仇討ちの違い、日本の切腹の場の美学などが話題になり、歌舞伎の花道の由来からブロードウェイで日本の真似をした花道がはじまったことや、では始まったばかりのストリップ劇が進歩しているから注目しろという際どい話まで出た。聴講する学生は演劇専攻者ばかりであったが教育学専攻とは全く違った雰囲気であった。演習は世阿弥の「花伝書」と歌舞伎の「役者はなし論語」を読んで議論することであった。世阿弥の「花伝書」はその名こそ知っていたが、何回も読み返すうちにその魅力にとりつかれた。これは教育論ではないか。そこで当時、出始めた教育系大学の論文をみると世阿弥の教育論は何点かある。そこで河竹先生に聞くとともに大和猿楽能の流派を調べよと参考書を示された。そこで猿楽能の観世流に焦点を当てると世阿弥の娘婿に金春禅竹があり、彼にも能役者の秘伝書があることがわかった。そこで大和猿楽能の稽古くを主題として日本教育史の修士論文にしたいと尾形先生に相談したらよからうということになった。当時、先生は次の講義題目として家学・流儀を研究しておられたから猿楽能もその一環として讚意を表されたのであろう。家学とは鎌倉幕府の成立で律令制度が崩壊した後、大学寮の明経道（経学）、文章道（文学）、紀伝道（史学）の公家学者が

その学問を子孫に独占させたこと、この習慣があらゆる芸能に及んで、例えば絵画、音曲、生花、喫茶、武術等に沢山の流派が生まれ、日本独特の東山文化（ひがしやま）を室町時代に成立させたことを言う。大和猿楽の稽古論を中世日本の独特な教育として尾形先生はこれに讃意を表したのである。私は室町時代に大和猿楽をつくり上げた観世流、金春流の世阿弥・金春禅竹の系譜を踏まえて「教育史上の金春禅竹」を修士論文として提出し合格した。私と同期の大学院修士課程教育学専修者四人のうち修士論文の提出者は私一人であった。

修士論文の審査後、原田先生から新制大学院の博士課程ができるからそれに入るように言われた。博士課程入学の通知がきたのは四月一〇日だった。その間、上村福幸教授が急死されて、後任に長谷川亀太郎教授が決つたのが三月末日であった。それゆえの遅れだとのことであった。

この年の四月某日、新制博士課程文学研究科の学生一名に対し古典語の試験をするという通知があった。英文学、ドイツ文学、フランス文学、ロシア文学、西洋哲学専修はギリシャ・ラテン語。中国文学・日本文学、日本史・東洋史・東洋哲学は漢文。演劇・美術・教育学・心理学はどちらでもよいことであった。私は漢文を選んだ。試験当日はできたばかりの大学院生図書室に一名が集められ、各自別々の問題が配られた。図書室には各種の辞書が置いてあるから何をみてもよいことであつたが、九〇分で、これだけの分量を和訳するには辞書など引いてゐる暇はなかつた。噂ではこの試験に合格したのは東洋史・東洋哲学の二名で、他は全員落第したとのことであつた。次いで春秋二回この種の試験をすると告示された。この試験を大学院事務室や助手たちはCandidate（博士候補生試験の意）と呼び、これに合格しなければ博士論文は提出できないとされた。さらに、この試験に合格するために、特別にラテンギリシャ語と漢文の授業を設けるが、これは博士課程の履修科目ではないと通告された。漢文の特別授業は教育学部の大矢根文治郎教授の担当で土曜日の午後九〇分行われた。私は以後四年間、休みなく出席し、四年後の

一九五七年四月のキャンデーデイトに合格した。

一九五三年四月、博士課程三年に編入された時、私は日本教育史を専攻したいと原田、尾形両先生に話した。両先生が了解されたので博士課程の授業はすべて尾形教授の講義と演習だけになった。新制大学院ははじめてのことだからであろう。博士課程の授業はすべて修士課程の学生と一緒にであった。年々、講義も演習も新しいテーマでやるのだから常に新鮮であった。五三年以後三年間の尾形教授の講義題目を並べると綜芸種智院、五山、登山、寛政異学禁藩学等である。例えば綜芸種智院を例にとるとまず講義で平安時代の有力氏族がつくった文章院、弘文院、勸学院、学館院、奨学院等私学の実態を述べたあとに綜芸種智院の研究状況を述べ、続く演習で、空海の「綜芸種智院式並序」を読み、議論する。「式並序」が『弘法大師全集』に収載されていることは予告されているから学生は予め用意しておかねばならない。「藩学」の場合で言えば先ず先生が名古屋藩の名倫堂について講義し、次いで学生が各自選んだ藩学を順次、発表した。基本史料としては『日本教育史資料』が示されていた。尾形先生は後に『学制実施経緯の研究』（一九六三年）、『学制成立史の研究』（一九七三年）の近代教育史に関する名著を著わすが、大学院草創期の授業はすべて近世以前のことであった。

四、一九五〇年前後の早稲田大学の雰囲気 —— 一学生がみた学生生活と学生運動 ——

朝、国電（現丸）高田馬場駅に降りて都電に乗り換え、早稲田通りを西に走って西早稲田で降り、大学に通じる裏道を通じてキャンパスに入る。この小路の両側に小さな書店、喫茶店、学生服屋、麻雀屋がひしめいて学生街になっている。この裏門から構内に入る時、学生は左翼学生の演説の洗礼を受ける。油っ気のない髪を振り乱して黄色い声

を張り揚げるが、言っていることはわからない。外国語を交えたむずかしい演説である。足を止めて聞く通学生はま
ずいらない。交替でやっているのか毎朝、同じ場所と同じようなことを叫んでいる。その根気には感心した。それを聞
き流して大隈銅像の前に出ると正門をはさんで大隈講堂の威容がみえる。大好きな光景で日本中の大学で、否、私が
見聞いた範囲の欧米の大学の光景でこれに勝るものはないと確信している。この光景は基本的には今も変わらず、建物
が高層化したただだが、私が入学した頃は今の三号館あたりが空襲で瓦礫化していた。もつとも翌五〇年、朝鮮戦争
がはじまると鉄くずが高騰したのだろう。九月に登校してみると瓦礫の山はなくなりきれいに整地されていた。以
後、校舎の再建が急ピッチに始まるのである。法学部が使用している八号館が当時、文学部の本拠であった。三階ま
でが教室で、四階に急ごしらえの教授研究室があった。大小の教室は一応整備され、授業に差しかえなかつたが暖
房が充分でなく、窓も破れたままの所があり、冬は外套がひょうを着たまままで授業を受けた。

大学周辺の風景を述べよう。キャンパスの東部・鶴巻町一带はいまだ戦災から立ち直ることができず、焼け跡に応
急の建てものがぼつぼつではじめたところであった。堀つ建て小屋のようなその店で焼きそばだの汁粉など売る店
があつたが、中でも学生の人気を集めたのが炊きたての白米あつちに熱々あつちのとんかつをのせたカツどん屋でいつも長蛇の列
ができていた。私が早大に入った四九年頃から東京の食料事情はよくなり、大学でも図書館の地下に学生食堂を設け
た。唯一の献立、ライスカレーは廉価であつたが、旨いと言えるものではかつた。キャンパス周辺にある古い暖簾のれんの
そば屋もこの頃から順次、開店した。これはさすがに旨かつた。地方出身の古い卒業生が生まれてはじめて食つたと
賛美する西洋料理の高田牧舎はすでに再開されていた。何を食べたか覚えていないが、美味と思つたことはない。こ
の頃になると米の配給が正常化したためか弁当持参の学生も多かつた。弁当を抜げる場所はまず大隈庭園である。整
備されてなく、囲いもないので出入り自由、三三五五連れ立つて池の周辺たしろに屯する。時には神田川を渡つて山県公爵

邸（椿山荘）に足を伸ばすこともある。ここも戦災で石塀がこわれ、出入自由であった。ここでは多くの日本女子大生が弁当をつかっていた。

女子学生と言えば、早稲田大学ではすでに戦時中から女子に門戸が開かれていた。新制大学になって女子学生は目立つようになったが、それは文学部の国文、英文、仏文、ドイツ文学や演劇、美術等の文学科・芸術科に限られていたようである。

大学キャンパスの西方、早稲田通りは当時復興し、高田馬場駅までの道路の両側は店舗、食堂、映画館がひしめいていた。店舗では古書店が多く、私は教育書が多く置かれた山野井書店と懇意になった。早稲田通りには都電が走っていて飯田橋から九段下まで行けるので、そこから神田の古書店街で書物を漁ることも覚えた。

当時の学生にとって学生街で遊んだり見聞を拓めるのは大事なことであったが、早稲田の学生はそれにも増して大隈大講堂や小講堂で催される演劇やオペラ、バレエの鑑賞や政治家、文芸家の講演が聴けることが貴重な体験であった。終戦の翌年からこれらの舞台芸術は復活していたが、戦災のため劇場が極めて少ない。大隈講堂は劇団にとって格好の劇場だったのだろう。大学当局も積極的に働きかけたように思う。大阪の文楽人形浄瑠璃、大谷冽子のオペラ、横山はるひ（早大卒業生）のバレエなどすばらしいものだった。小劇場では内外の文学者を招いての講演会があり、政治家の演舌もあった。私は可能な限り、これらを聴いて学生生活を満喫したのである。

戦後の学生生活といえばアルバイトがある。

私自身のことを述べよう。学部時代の二年間は家庭教師をした。師範学校の先輩で竹早の女子師範附属小学校の教員をしている者から頼まれて担任クラスの児童四名を二名ずつ二組とし各組、三時三〇分から六時まで週二日、国語と算数の学習を助ける約束をした。一ヶ所は関口台町、一ヶ所は音羽町とともに児童の住宅。二ヶ所とも早稲田から

遠くないので帰りがけに立ち寄って帰宅できる便利さがあった。一人一ヶ月五〇〇円の謝礼であるから二、一〇〇円になる。小遣い銭としては充分であった。同じ専攻の学友のアルバイトについては互いに知らない、キャンパス内の風景からみると階段の踊り場に陣取って、自作の詩集を売る学生にまじってピーナツを売っている者があったが、或る日、鯛を五、六匹ずつと小わけにして売る者があった。聞けば早朝、銚子に出かけて仕入れてくるという。結構、買い手がついたアルバイトであった。

大学院生は調べものが多いからアルバイトの時間がない。しかし教育学専攻の者は高校教員の免許を持っているから高校の非常勤講師や定時制高校の教師をやっている者が数名いた。私は大学院に入った年から都内の私立女子高校とその附属中学校の非常勤講師を勤め、月給二、〇〇〇円以上を貰った。

早稲田大学で体験したイベントを語る前に当時の大学の、特に早稲田大学の学生運動と、その特異性について述べておかねばならない。私は入学早々、どのような運動部や文化部があるのだろうと探した。当時は後年のように入部勧誘の活動がなかったからさっぱりわからない。現在、中央図書館のある所が野球場で、選手たちが練習していた。六大学リーグ戦での有力選手がいたらしく、連れの友人はさかんに応援していた。また学内プールでは四八年八月のロサンゼルスでの全米水泳選手権大会で世界新記録を出した日大の古橋氏と一緒に四〇〇米競泳に参加した村山氏が水泳していた。早稲田の運動部の選手の中にはすでに日本中に知れわたった選手や外国にも知られた選手がいたのである。詩や文学の同人会はいくつあったかわからない。教育学でも同人誌をつくろうと大学院生（旧制）から誘いがあった。河竹先生の演劇ゼミに参加した時のメンバーの中には学内のいくつかの劇団に所属していた学生もいたし、文学座のレッキとした俳優もいた。当時の大学生の中には、特に早稲田の学生の中には学生というより社会人に近い

者がまぎれ込んでいたのである。私が入学した一九四九年は被占領期の末期で独立を睨んで旧政党人が続々追放解除になり、レッドパージがはじまる時期である。学内の左翼学生が集会を催し演説するのはそれに関連する。左翼学生の活動も学生運動の一つとみるならば、彼らは学生服を着た社会人であった。当時の早稲田大学学生の中にはこのように社会的に認知された活動家が学生の顔をして混在していたのである。

私が早稲田に入った一九四九年は民主改革が一段落し、経済再建に向かおうとした時期である。被占領期の終焉も囁かれていた。この年一月の総選挙で民自党（現自民党）が圧倒的多数の第一党になり、第三次吉田内閣が政権を握った。これまで時々の政権の一翼を担った民主党と社会党は議席をへらし、これまで小党であった共産党が三五議席を獲得し、勢いに乗った。安定政権を勝ちとった吉田内閣は経済発展と被占領からの独立を目指す。それには労働組合を牛耳る共産党を抑えつけねばならない。同じ考えがGHQにもあつたのだろう。民間情報教育局（EIA）のイールズが「赤色教授を大学から追放せよ」と演舌しはじめ、九月には全国教育長会議が「赤色教員」の追放を決議した。こうしてレッドパージが政治、社会上の課題になったのである。

四九年一〇月に共産党独裁の中華人民共和国が成立し、五〇年六月に朝鮮戦争が勃発した。ここにヨーロッパとアジアに保守的自由主義国家群と革新的共産主義国家群の対立が鮮明になり、日本は米国を盟主とする環太平洋諸国の最前線に立つことになったのである。

朝鮮戦争勃発直後、早稲田の文学部の授業の前後に決起を促す演舌を叫ぶ者があつたが、無視され、授業は平常通り続けられた。またこの頃からキャンパスの各所でレッドパージ反対の演説があつて聴衆もいくらかいたが、それが運動にはならなかった。数年前、あの凄まじい戦争と敗戦を体験したわれわれにとって朝鮮戦争勃発は重大事件である。しかしそれはこれが第三次大戦になるかという心配でレッドパージ事件どころではなかった。文学部に限って言

えば「チャタレー夫人」が芸術か猥褻かの議論に熱中していたのである。

やがて夏休み、学生は姿を消した。私はこれまでの家庭教師のほか、立川の米軍基地の兵隊用図書館の貸出係のアルバイトを続けた。この間、朝鮮半島では北朝鮮軍が南下、韓国軍を制圧したかにみえたが九月一日、国連軍が仁川に上陸、北朝鮮軍を撃破し、ジョンヤンを占領した。然るに予期に反し中国人民義勇軍が戦場に現われ、朝鮮戦争は次の段階にすすむのである。日本国内では警察予備隊（自衛隊の前身）が創設され、共産党中央委員は公職追放されたので労働組合における共産党の影響力は低下した。こうしたなかでレッドパージが順次行われていったのである。

九月に登校してみると空襲で廃墟となっていた旧恩賜館跡（現4号館あたり）がきれいに整地されていた。日本は国連軍の兵站基地になったので軍需品の産業が復活した。それゆえ鉄くずが暴騰した。これが金偏景気かねへんと囁かれた。登校する学生を待ち受けていたのは全学連系の活動家達であった。レッドパージがすでに始まっており、官公吏、新聞等の報道関係者、大企業の労働組合幹部に及んでいる。いつ大学教授に及ぶかわからないから反対のキャンペーンを張ると同時に九月に行われる前期試験をボイコットすると言うのである。これには大学当局も一般学生も驚いた。レッドパージが言われはじめた頃、早稲田の教授会は学問の自由おかが冒されると反対を表明していた。しかしその手段として定期試験をボイコットするとなるとこれは許されない。早稲田は新制大学を発足させて第二年目である。新制総合大学として日本中の大学から注目されているのである。教授会は試験実施を表明した。しかるに全学連に加盟している早大の活動家たちは全学連の決定だと称して、試験ボイコットを主張する。やがて都学連が都内大学の試験ボイコットを声明して緊迫した状況となった。活動家たちのキャンペーンは連日、キャンパスの各所で行われた。大学本部前か、大隈銅像前が多かったが、数人の弁士の前に四、五〇人の同調者が座り込む。その周りを一般学生が囲む。彼らは決して座らない。いつでも逃げられる用意である。私もその一人であった。演舌は交互に何人かの弁士が

するのだが、吉田嘉清君が抜群に上手であった。学生服に油つ気のないぼさぼさの髪で語りかけるように話すのが高揚すると髪振り乱して絶叫する。座り込んだ同調者が、「そうだ」と唱和する。また同調者が興奮のあまり、破壊的暴力的なことを叫ぶと吉田君は一転、それをたしなめ静かな口調になり、再び自分の口調で試験ポイコットの意義を説く。われわれ立見の傍聴学生も彼の名演舌に聴き入ってしまう。私はふと、かつてニュース映画でみたヒットラーの演舌を想い出し、吉田君を重ね合わせた。吉田君は後に原水協の立役者になった。

その頃のある日、文学部の大教室での授業が終った直後、吉田君をはじめ同調者数人が教室に乗り込んできて前期試験のポイコットを訴えた。彼らの演舌を聞いた文学部学生の一人が立ち上り、自分は苦心してこの大学に入り勉学しているのだから試験ポイコットはできない「と訥々と語った」。それに対する吉田君ら一党の反撃は物凄く、集中砲火を浴せた。その学生は何度も同じ趣旨をぼそぼそ語り、意志をかえなかつた。私はその強さに感心したが、立ち上って彼を援助する言を吐くことができなかつた。恥じている。文学部学生の大半がそうだったのであろう。一人へり二人へりで学生はその教室から消えた。

こうした騒動のあと、前期試験が行われた。文学部について言えば試験は完全に行われた。事情を慮おもんばかってレポート提出で済ませた授業が多かつたためもあるが、筆記試験も整然と行われた。しかし他の学部はそうではなかつた。一月、都学連のゼネスト決行に応じた学生大会で警官隊と衝突、数十名が検束された。学部長会議はそれらの学生を除籍処分にした。私はこれら一連の事件を学内の掲示や新聞報道で知った。その一端を目撃したことはあつたが全体はわからない。この事件を通じて私が得た感想を述べよう。

ことの始まりは大学教員のレッドパージ反対であつた。しかし過激な左翼学生の運動が暴徒化して試験ポイコットまで過熱すると教授会は一転して、この学生運動を押さえにかかつた。そしてこの運動の首謀者たちを退学放校に処

した。この処置は正当だったと想う。そして、これと同時に大学教授のレッドバッジの心配は消し飛んだ。レッドバッジ反対を旗印に全学ストライキを計画したこの学生たちはわが身を犠牲ぎせいにして目的を達成したことになるか、このような想いを抱く。次に想うのは大学生の、特に早大生の行動は社会問題化するということである。この時の早大生の行動は新聞やラジオで報道され、ニュース映画で報じられ、街の話題になった。一般国民や市民は早大が一体になって暴れているように思ったかも知れないが、現場に立った我々からみるとそうではない。騒然とした本部前の学生たちをよそに各教室では授業が整然と行われていたのである。応援団の練習、演劇の稽古、運動選手の練習、アルバイトに励む者、早稲田の学生はそれぞれの道で活動していた。一、〇〇〇人に及ぶ学生が一ヶ所に集り氣勢を揚げれば世間は早稲田大学全体がそれに靡いたように錯覚するが、入学以来、早稲田大学の自由な気風になじんだわれわれは自覚して自分のやるべきことに励んでいたのである。

私が学生運動に多少の関心を持ち、事件あるごとに傍観者として参加したのは文学部の学生時代までであった。新制大学院の学生になってからは勉強が非常に楽しくなったのでそれらの事件から全くの傍観者になっていったのである。